

経済産業大臣指定伝統的工芸品

きしゅうたんす

紀州箆笥

伝統マーク 昭和62年指定 / 指定された地域(和歌山市)

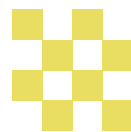
木の神様に愛された伝統の工芸品

和歌山が“木の国”と呼ばれる由縁は、木の神であるいたけるのみこと五十猛命が鎮座するからともいわれています。深い山脈が連なる森の木々に神が宿る自然信仰。その木の国を代表する伝統的工芸品が「紀州箆笥」です。素材は白く、軽く、柔らかな桐の木。伸縮や狂いが少なく、火災からも“身を焼いて中身を救う”といわれることから、衣装や財産の保管に適していました。



シガ木工代表取締役
●紀州箆笥 伝統工芸士
志賀 啓二さん

昭和24年生まれ、和歌山市出身。高校を卒業して18歳から家業を継ぎ、父を師として技術を学びました。造材から木取り、本体加工、組み立て、仕上げとほぼ全行程を手仕事で仕上げられる数少ない職人のひとり。現在、30代から70代の職人を率い、品質・デザインとも優れた紀州箆笥の伝統技術と技法を継承。絶やすことなく6代目へと受け継いでいます。



城下町に集まる職人と良質の木材

「紀州箆笥」の始まりは定かではないものの、文献「南紀徳川史」には、和歌山城に落ちた落雷で火災が発生し、天守閣を含む多くの建物や道具類が炎上。しかし翌年には城下町に住むほとんどの人が城の再建に関わり、同時に、長持ちなども作られ献上されたと記されています。時は嘉永3年(1850)。この時代にはすでに箱物を制作する技術があったということ。また当時は、山で切り出した木材を川に流して運び、支流が集まる紀の川を使って運搬。終点となる河口の和歌山市には、良質の材料と優れた職人が集い、家具や建具が生産されていました。

娘の婚礼支度は総桐の紀州箆笥

箆笥を手掛けたのは、江戸時代の初め頃。史料の記録によると“手たんす”が婚礼支度として、若山(現在の和歌山市)で買われたことが書かれており、当時すでに箆笥が婚礼の調度品として製造されていたことをうかがわせます。教養人でもある川合小梅の「小梅日記」には、「三丁目へたんすを見に行く」とも綴られていました。現在の新通3丁目が、明治から大正、昭和にかけての家具屋街。娘が嫁に行く時には箆笥を一棹贈る日本の風習が、箆笥づくりを盛んにし、技術的にも発展を遂げました。今日まで絶やすことなく受け継がれた紀州箆笥の技術・技法は、県内外から高い評価を受け、紀州のほか、新潟、春日部、名古屋、泉州の5カ所だけが伝統的工芸品に指定されています。



伝統的な職人にしかできない仕事

紀州箆笥の最盛期は、大正時代の中頃。従業員200～300人の大規模工場も登場し、絶頂期を迎えました。その後、戦後の混乱期は乗り越えたものの、全国の生産地で合理化・大量生産と、現代的なポリエステル仕上げの箆笥が主流となり規模が縮小。「洋式への生活スタイルの変化もありますが、阪神大震災も大きな転機になりました。時代の流れとはいえ、伝統を受け継ぐのは現在数社のみ」と話す、シガ木工の伝統工芸士・志賀啓二さん。現在、紀州桐箆笥協同組合の組合員らが一丸となって、技術・技法を継承。さらに職人にしかできない細やかな仕事にアイデアを加え、伝統工芸の新たな道を探求しています。

【紀州箆笥の制作工程】



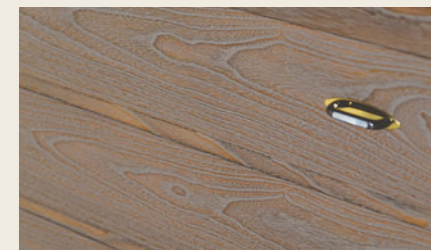
桐の性質を知り、造材した木材を無駄なく箆笥に生かすための重要な木取り。木肌を見極め、扉や引き戸など適材適所に無駄なく切断。
木釘作りは職人の重要な仕事。ぬかと一緒に木釘を熱し、内部の水分を飛ばしてぬかが持つ油脂を表面にまとわせる。



木目の細かい木肌は、箆笥の印象を決める扉に使用。加工はすべて職人の手仕事。経験と勘が桐材の美しさを最大限に引き出します。
紀州箆笥の特徴は、美しいだけでなく高い気密性。引き出しをそっと押すと、隣の引き出しがすっと前に。空気力で動きます。

挑戦が新しい伝統への第一歩

軽さだけでなく、湿気の多いときには水分を吸い、乾燥時には水分を出す桐の性質。“身を焼いて中身を救う”といわれるのは、火災の際に大切な衣類や財産を守ってくれるという意味です。現在、その昔からのいわれと技を大切に守り、洋風の間取りにも調和する桐箆笥を制作。職人技が光る手仕事はそのままに、仕上げを工夫。白い木肌を際立たせる“砥の粉仕上げ”に対し、木目を模様として浮か上がらせる“焼き桐仕上げ”を考案。ぬくもりのあるモダンな風合いが魅力で、現代建築にもぴったり。挑戦と進化、伝統産業として未来を見据えます。



白い木肌が際立つ紀州箆笥の砥の粉仕上げ。一方、焼き桐仕上げは焼き焦がしの新技法を用います。